

多田謡子

反権力人権基金

News

No.16 2022/07/01

発行・多田謡子反権力人権基金運営委員会

<https://tadayoko.net>

2021年12月18日

第33回受賞発表会を開催しました



多田謡子反権力人権基金は、2021年12月18日、東京・お茶の水の連合会館に70名が参加して、第33回反権力人権賞受賞発表会を開催しました。

発表会では、受賞者の、差別・排外主義に反対する連絡会（差別、排外主義との闘い）、フジ住宅によるヘイトハラスメント裁判・原告と支える会（社員へのヘイトハラスメントに働きながら反対）、桜井昌司さん（冤罪との闘い、冤罪被害者救援の闘い）、へり基地反対協海上チーム（辺野古新基地反対闘争）から講演を受け、基金から多田謡子の著作「わたしの敵が見えてきた」と賞金30万円が贈られました。

なお、発表会の冒頭、長く「行動する女たちの会」で女性差別と闘い、前年に亡くなった故長谷川美子さんからの寄付により、賞金を10万円増額し、

今年度の受賞者を4つに増やせたことが報告され、故人への深い感謝を全体で確認しました。

コロナ禍のなかで、残念ながら恒例の記念パーティはできませんでしたが、発表会終了後、受賞者との交流会が行われました。

ロシアによるウクライナ侵略によって世界は再び世界戦争の危機に直面しています。第二次世界大戦の反省の上にたって、世界中の人びとが願ってきた、戦争のない世界の実現はますます見通せなくなっています。多田謡子反権力人権基金はこうした困難な状況に負けず、人権と自由を守り、平和に生きる権利を守るために活動する人びとを励まし続けたいと考えています。

12月17日に予定している第34回受賞発表会へのご参加をよびかけます。

多田基金は継続のためのカンパを呼びかけています。

第33回受賞発表会

2021年12月18日 連合会館（東京・お茶の水）

差別・排外主義に反対する連絡会 （差別・排外主義との闘い）



2009年、強制送還の危機に直面したフィリピン人一家が住む埼玉県蕨市の街、子供が通う学校の周辺にまで、100名を超える排外主義者が押しかけて、ヘイトスピーチを繰り返しながらデモ行進を行う事件が起きました。差別・排外主義に反対する連絡会は、一家を守る活動を通して2010年の発足、排外主義者の攻撃から、差別される人々、差別と闘おうとする人々を守るための活動を続けています。

まず、活動を記録した映像が上映されました。従軍慰安婦問題を考えるシンポジウムの会場前で、大声で怒鳴り声をあげ、押し入ろうとする排外主義者たち、理性的に話し合うのではなく、ただただ大声で威圧してシンポジウムを破壊しようとする人々と、その前に立ちふさがって、会場を防衛しようとする人々の映像が流されました。

登壇した三木譲さんは、「排外主義者たちは、こうした行動をインターネットで生中継して、また事後配信して、戦争の問題、民族差別の問題を訴えればこういう事になると宣伝し、自分たちの行動を誇示しようとしています。私たちは、そうした彼らの意図をくじくために活動してきました」とのべました。

連絡会には、さまざまな団体からの要請が来ます。防衛のために行くことになっていた名古屋での「表現の不自由展」では、事務局に届いた封書が破裂したことで、3日目以降は中止を強いられました。

「ヘイトスピーチやヘイトデモについて、民事訴訟では勝利できるようになりましたが、例えば沖縄、辺野古で闘う人びとへのヘイトスピーチに対して、政府は何も言わない。宇治・ウトロでの放火事件に対して首相は何もメッセージを出していない。裁判では勝っても、ヘイトを許さないという考えはまったく社会に定着していない。2009年から2021年まで、残念ながら状況はほとんど変わっていません。差別と闘おうとする人々の、やってほしいこと、やってほしくないことをしっかり聞いて、

代行主義にならないようこれからも頑張っていきたい」と三木さんは述べました。

フジ住宅によるヘイトハラスメント 裁判原告と支える会

（社員へのヘイトハラスメントに働きながら反対）

大手不動産会社「フジ住宅」では2012年ころから、社員が業務日報に「朝鮮人は嘘しかつかない民族」「慰安婦は売春婦」などのヘイトスピーチを書き連ねたものが、全社員に回覧されるようになりました。それらは創業者会長の差別思想にもとづいたもので、侵略戦争を否定する育鵬社の歴史教科書採択の運動に社員が動員されることもおきました。

在日コリアン3世の原告女性は、ヘイト文書配布、政治的運動への参加強制による精神的被害に対する損害賠償、民族差別のない職場で働き続ける権利を求めて2015年に提訴、一審に続いて、2021年11月、大阪高裁は、フジ住宅による人種差別が違法であると認定、損害賠償を命じ、ヘイト文書の配布差し止めを命じる判決を下しました。

原告女性は「私自身のことを話したい」と前置きして「働きやすかったフジ住宅は、ヘイト文書が回覧されるようになって変わってしまった。私は口数も少なく、内向的な性格ですが、自分自身の日常が壊されることを何とかしなければと思い、自分ができることをやろうと頑張ってきました」と述べました。小さな声で少しずつ、しかし、しっかり話し続ける原告に、会場から大きな拍手が起きました。

「労基署では『法律もないし何もできない』『思想信条の自由がある』と言われたが、裁判の中で弁護士や支援する会、教科書の会や救援の会など、支えてくれる人たちと知り合うことができた。不満はあるがすごくいい判決ができました。この流れをヘイトを許さない社会全体の流れにしたい。ヘイトのない日常にしたいという思いで頑張っています」と締めくくりました。



常にしたという思いで頑張っています」と締めくくりました。

支える会の文公輝さんは「民族差別の言動禁止だけでなく、差別的思想が醸成されないよう配慮する義務が使用者にあるとした高裁判決は、社会全体でも大きな力となる。フジ住宅は最高裁に上告

したが、判決が認めた仮処分の権利も活用し、取引先企業や銀行、「健康優良企業」に指定した経産省にも働きかけて闘いたい。今も働き続けている原告を孤立させず、原告が差別のない職場で働ける日まで支援したい」と述べました。

桜井昌司さん

(冤罪との闘い、冤罪被害者救援の闘い)



桜井昌司さんが、「11年間東京拘置所に在監し、18年間千葉刑務所で服役していた。再審裁判で勝利し、国賠訴訟でも、2021年8月に『警察、検察の違法な捜査がなければ、無罪判決は当然としても、逮捕されることも起訴されることもなかった』という完全な勝利判決をとることができた」と、晴れ晴れと話す会場から大きな拍手が湧きました。

「布川事件はなぜ勝ったか？ みんなの力をあわせて勝とうという素晴らしい弁護士がいたこと、桜井昌司と亡くなった杉山卓男の二人が自分の言葉で発信し続けたことがあると思う」「警察も検察も私たちが犯人でないことを知ってたんです。しかし、警察と検察は私と杉山を犯人にすることで一件落着とした。そして世間もああよかったとなった。私はたまたま冤罪に巻き込まれて、刑務所に入ったから、日本には社会正義はない、うその社会なのだということを知ることができました。だから、29年間刑務所に入って、54年間闘って、完全勝利した今思うのは、ああ、刑務所に入ってよかったなあという思いです」というお話しに驚嘆の声があがりました。「31歳のときに無期懲役が確定しました。ともすれば無気力になってしまう中で、私は、一生は一回しかないんだ。今日という日は一日しかないんだ、その日、その日、出来ることを精一杯やろう、全力で生きようと思いました」

桜井さんは2020年に癌を宣告され、それ以来、病をおして、冤罪のために投獄され苦しんでいる人びとを支える活動、冤罪を生まない社会をつくる運動を続けています。

「冤罪を生まない社会にするためには、どんな事件も、税金を使って警察、検察が集めた証拠を誰でもすべて見るようにすることです。それと、権力者を守るために真実を隠蔽し続けている検察を、本当に権力者から独立した組織にする必要があります。今も冤罪で苦しんでいる多くの人びとの

思いを背負って、命ある限り声をあげ続けたい」

桜井さんがそう締めくくると、会場からはふたたび大きな拍手が沸きました。

へり基地反対協海上チーム

(辺野古新基地反対闘争)



山口陽子さんは、第1回受賞者の知花晶一さん以来、沖縄からの歴代受賞者が今も闘い続けねばならない現実にあふれ、「現在では、北部訓練場跡地から辺野古、嘉手納、普天間、南部の土砂搬出地から、宮古、石垣まで、琉球弧全体が闘わざるを得なくなっている。今回の受賞は琉球弧の軍事要塞化と闘うすべての人びとに贈られた賞だと考える」と述べました。

山口さんの所属するカヌーチームは、辺野古新基地建設のために続く埋め立てに、海上に漕ぎ出したカヌーで抵抗を続けています。2004年から続く闘いについて、山口さんは「海上チームは多様な個人が集まり、議論を重ねながら、船団の支援、座り込みを続けるお母さんたちの支援、そして全国からの支援を受けて闘い続けている」「2016年の不当逮捕や、2021年11月の傷害事件があった。海上保安庁は『やろうと思えばいつでもやれるんだよ』とおどかすが、沖縄の、全国の世論、監視が私たちを支えている。権力側の圧倒的な暴力に、非暴力・不服従で闘い続けたい」と述べました。



続いて登壇した牧志治さんは、ダイビングの指導員でしたが、大浦湾の美しい海と、埋め立てのための海上やぐらに日夜のぼり続けて抵抗している女性たちに感動して、闘いに参加しました。

埋め立て承認をめぐる裁判で、最高裁は沖縄県には訴える適格性がないと門前払いの判決を出しました。牧志さんは「裁判所はことごとく沖縄の主張を踏みにじる。7割の県民が反対した辺野古新基地建設に対して、訴えをおこす権利がないとは、沖縄を植民地と考えてるのかという怒りが湧く」と述べました。

牧志さんたちダイバーが撮影した海中写真で、「環境に配慮して」いるはずのサンゴの移植が、実は半数以上を死滅させている実態が映しだされ、「生き物すべての命を守るために闘い続ける」と述べて、牧志さんは発言を締めくくりました。

多田基金の詳しい情報はホームページでご覧いただけます。 <https://tadayoko.net>

第34回多田謡子反権力人権賞 候補者推薦のお願い

2022年6月
多田謡子反権力人権基金運営委員会

本年度も、下記要領で多田謡子反権力人権賞の候補者推薦を受け付けます。自薦、他薦は問いません。多数のご推薦をお待ちしています。(これまでの受賞者は当基金のホームページで閲覧できます。)

※多くの皆さまのご支援により、副賞賞金を30万円に増額することができました。※※

・賞の内容

多田謡子の著作「私の敵が見えてきた」および金30万円の贈呈

・選考基準

国家権力をはじめとしたあらゆる権力に対して闘い、自由と人権を擁護するために活動している個人または団体

・推薦方法

自薦、他薦とも可。候補者名と活動分野の簡単な紹介を付して、文書で下記住所に郵送、FAXまたはe-mailでお送りください。

・推薦締切

2022年8月31日
注！！ 締め切りが1ヶ月早くなりました。

・推薦受付先

〒105-0004
東京都港区新橋2-8-16
石田ビル5F 救援連絡センター気付
多田謡子反権力人権基金運営委員会
TEL 03-3591-1301
FAX 03-3591-3583
e-mail web@tadayoko.net

お問い合わせにはできるだけe-mailをご利用ください。なお、受賞者には受賞発表会での講演をお願いいたします。

12月17日(土)受賞発表会を開催する予定です。

- 第34回多田謡子反権力人権賞受賞発表会
 - 日時 12月17日(土) 午後2時~5時
 - 場所 連合会館201号室
東京・御茶ノ水駅から徒歩5分
 - 発表会后、同所で記念パーティーを行います。
 - 発表会、パーティーとも参加費無料です。
- ※ コロナ禍により予定変更の可能性があります。



基金継続のための寄付のお願い

郵便振替用紙を使った振込み

寄付と明記し、氏名、住所をお書き下さい
口座番号 00110-2-356484
口座名称 多田謡子反権力人権基金

金融機関の口座からの振込み

- ◎ 記号・番号を使った振込み
 - ・ 記号 00110 ・ 番号 356484
- ◎ 店名(店番)を使った振込み
 - ・ 銀行名 ゆうちょ銀行
 - ・ 店名 〇一九店(ゼロイチキュー)
 - ・ 店番 019
 - ・ 預金種目 当座
 - ・ 口座番号 0356484
 - ・ タダヨウコハンケンリョクジンケンキキン
(金融機関からの振込ではお名前、ご住所がわかりません。メールでお知らせいただければ領収証をお送りします)

多田謡子反権力人権基金 News

No. 15 2022年7月1日発行

編集・発行 多田謡子反権力人権基金運営委員会

〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16 石田ビル5F 救援連絡センター気付
TEL 03-3591-1301 FAX 03-3591-3583 e-mail web@tadayoko.net